

内モンゴル東部地域における農業の展開過程とソバ産業に関する研究

秀 栄（国際開発学分野）

【目的】

内モンゴル東部地域では、遊牧という生活スタイルに適合する作物として、古くからソバが栽培され、食生活の中にも深く根付いてきた。しかしながら、定住化が進む中で、それに見合った農業生産が普及し、ソバもこれまでとは異なる位置づけになっている。そこで、本研究では内モンゴル東部地域に位置する通遼市フレ・ホショー（庫倫旗）を事例に、当地の農業の歴史的展開をふまえて、現段階におけるソバ生産の発展条件を明らかにすることを目的とする。

【方法】

文献調査と現地での資料収集をもとに、内モンゴル東部地域における農業の展開過程を整理、検討するとともに、フレ・ホショーにおけるソバの位置付けと特徴を明らかにする。その上で、2015年8月に現地で収集した統計資料及びフレ・ホショーに属するAガチャーの農家調査をもとに、フレ・ホショー農業の近年の変化とソバ生産の発展条件を検討する。

【分析結果】

内モンゴル東部地域では古くからナムク＝タリヤ農耕が行われてきた。これは不耕起、不施肥、不除草の農法で、春に播種した後は秋の収穫まで作業することがなく、遊牧を営む上で障害とならなかった。ソバはこの農法に適した作物として定着し、食生活の中に根付くことになった。定住化の進展や漢人の流入により、徐々にシャンタイ＝タリヤ農耕と呼ばれる耕起、施肥、除草を行う農法が普及し、中華人民共和国建国以降には農業の主流となった。こうした農法の変化とともに、近年では中国の経済成長による食生活の変化に伴い、フレ・ホショー全体では、家畜飼料の原料となるトウモロコシ生産が増加し、自給用及び販売用のソバの生産は伸び悩んでいる。ただ、この地の自然条件がソバの生産に適しており、国内外の需要動向から今後の販売拡大も期待できることから、フレ・ホショー政府は一部の地区でソバの生産・販売振興策を実施し、その地区では近代的農法によるソバ生産が維持されている。しかしながら、農家調査を行ったAガチャーでは振興策が実施されておらず、ソバ生産は遊牧時代に近い粗放的生産のままであり、近代的農法のトウモロコシ生産にとってかわられている。食生活では依然としてソバが大きな位置を占めているものの、農業収入の大部分はトウモロコシの販売によるものであり、自給用のソバさえ生産していない農家も多い。

【結論】

内モンゴル東部地域でソバ生産が定着したのは自然条件が適していたこととともに生業である遊牧と競合しない栽培方法が可能であったからである。したがって、近代的農法の下で発展させるためには、生産と加工・販売を組み合わせた支援策が条件となる。